

# 開局のころ

JA5VE 久樹 隆彦

## はじめに

横須賀クラブの50周年おめでとうございます。  
私も横須賀に住み始めて25年になりました。

## 当時のサフィックス付与状況

私がアマチュア無線に出会ってから45年弱で、JA5VEと同時期に開局した1エリアの局はJA1Exxになります。また1エリアの電話級の最初の局はJA1Cxxの後半。5エリアではJA5Nxです。1エリアの2文字の方に比べるとかなり後の開局になります。開局のころは、実年齢よりも10歳以上年配と見られ、中学生を相手に南方戦線の話を始められるなど、難儀した覚えがあります。

## 記述式の国家試験

私が無線を始めたきっかけは、中学の時に、先生に乗せられて最初の電話級の国家試験を受けたことでした。先生から渡されたガリ版刷りのテキストを暗記して、初めて施行された電話級の試験を受け昭和34年5月30日付けで従事者免許を取得したのが始まりです。この頃の国家試験は電話級も筆記試験で、問題を読み、答えを書くための漢字の読み書きにも一苦労したことを覚えています。

このころの出来事として覚えているものに次のようなものがあります。

- 1) 初めての電話級と電信級の国家試験(1959年)
- 2) クラブ局の受付開始(1959年)
- 3) JARLの認定局が運用開始(1960年)

## 開局準備

「従事者の免許を取ったのだから次は局免を」と、これもまた先生におだてられて、開局準備に入りCQ誌の記事を参考に開局のリーグの検討を始めることになりました。この時先生は合格者4名を徳島クラブに紹介したり、「普通科(高校)は定員割れとなるから……」と親を説き伏せるなどいろいろ苦労されていたようです。

## 開局申請

どう考えたかは忘却の彼方ですが、終段807シングル、変調器6V6プッシュプル、プレートスクリーン同時変調、水晶発信(途中でVFO追加)、スーパーヘテロダイナ受信(高1中2)、非接地ダイポールアンテナの構成で3.5Mcと7Mc帯での運用を条件に34年8月に局免許の申請にこぎつけました。

## 新設検査を受ける時代

当時はまだJARLの認定制度ができる前で、7Wの空中線電力でも電波管理局へ申請して、新設検査に合格してようやく開局できる時代でした。提出した申請書は以降1年間にわたり何度か往復し、昭和35年8月になって予備免許が与えられました。申請書が何度か戻された理由は「捨

印」を押していなかったためとのことで、チョットした誤字脱字だけでも戻すことになったようです。

## 中学校のクラブ局申請

個人局の申請中にクラブ局の申請受付が始まりました。そこで先生の「JA5YAAをいたごう」という音頭のもとに申請受付開始に合わせ、申請書を送りました。結果はJA5YADになりましたが、初めての中学校のクラブ局ということで何回か新聞の取材があったことを覚えていてます。この局はアマチュア無線に熱心であった前述の先生の転勤とともに自然消滅したようです。中学では生徒だけで、クラブ局を維持することは無理だったようで、今思うと、JA5YAAが取れなくて良かったと思います。

## 部品集めから新設検査の様子

このころの苦労は地方では送信機を作るための部品がなかなか入手できないことで、通信販売か大阪や東京の大学に行っている方をお願いして買ってきていただくなどの方法によって入手していました。私もこの方法で、水晶発信器、変調トランス、低電圧放電管、VFO用のシールドケースといったものを手に入れました。

予備免許が下りて試験電波を出し始め、新設検査の日取りが決まったころ、いきなり本免許で運用するJARLの認定局が出てきました。

新設検査は四国放送の定期検査をした検査官により検査が行われました。私は固定局で申請していましたが、検査官が家にこられました。このとき移動局で申請していた局は私の家への移動命令が出ています。当時の移動局の規定に「一体として無線設備を移動できること」が条件にあり、これをテストされたようです。

いまは小型のトランシーバもありますが、当時は真空管の時代で、どうしても大きくなり、送信機と受信機が別々の装置になっているのが普通でした。自家用車を持っている家も少なく、移動はけっこう大変で、その局もリアカーにリーグを積んで自転車で引っ張って来ました。

新設検査の日徳島クラブの会長さんや前述の先生の他、ローカルの数局が来てくれました。

検査はいろいろありましたが印象に残っているのものに、次のようなものがあります。

- 1) VFOの安定度試験  
検査官が持って来た発信機とのゼロビートを取り30分間程度ずれないかどうかをチェック。
- 2) VFOのカバー範囲の妥当性  
VFOの発信範囲が広すぎることはないかどうか。
- 3) スプアスの調査  
電波を発射させ、測定器を積んだ車で付近を回り、スプアスの状態を調べる。

このうち、2)で「カバー範囲が広すぎる。すぐ処置できないようなら再検査する」との指摘がありました。

これはCQ誌のオールバンドの送信機の記事に載っていたコイルの巻き数等の定数とバリコンの容量をそのまま使ったため、「3.5Mと7Mだけの場合には発信範囲が広すぎる」ということでした。来ていただいていたローカルの方

からバリコンの羽を少なくするとカバー範囲は狭くできるとのコメントをいただき、もう一局の検査中に処置するというに、改めてその日の内に処置をして無事新設検査をクリアしました。

無線検査簿にはこの新設検査の記録だけが残っています。

写真1はこの新設検査を受けた時からの変調器で、以降50MHz用のリグにも使用し、昭和48年まで使用しています。



写真2は石版印刷による最初に発行したカードです。

### オンフレではないのが常識？

開局のころの交信は3.5Mや7Mでも水晶による固定周波数の局もあり、相手局と周波数がきちんとあっていることはまれで、現在のように「この周波数は・・・局の周波数・・・」という意識はあまりなく、交信が終わった局を呼ぶ時も交信したい方の局を呼んでいたと思います。

呼ばれる方も自分の周波数付近を探していました。

その後、京都、東京等で間借りや、アパート暮らしとなり、簡単にアンテナが上げられる50MHzのみの運用に移ったこともあり、横須賀に来てHFを再開した時にコールした局から「周波数を合わせるように」と言われてとまどったことを覚えています。

### 50MHzにQRV

昭和38年に京都で間借りすることになりました。これが6mを始めるきっかけとなりました。このころの6mの様子を少し紹介しておきます。

アンテナがなんとかなるバンドはということで、50MHz用のクリコンを作り受信してみたところ数局の交信

が確認できました。

交信の方法はCQを出した局は最後に「50.1Mから50.6Mの間を低い方から・・・」のようにバンドのどの辺りをどの方向に探すか、をアナウンスして受信に移っていました。

これは局数も少なく、ほとんどの局は数個の水晶発振器で運用していたためのことで、数100kHz離れた局同士の交信も日常的に行われていました。

写真3はこれならなんとかなるということで、50MHzの運用のために作った50MHzの送信機で変調器は前述の写真1のものです。



左上のソケットが水晶発振器のソケットです。ケースはトヨムラのTEC-6（キャリアコントロールのAM機）のものでした。

この送信機は昭和39年に使い始め、ドライブ段をトランジスタに置き換えたり、VFOを使えるようにしたりの変更を加えながら、以降10年間使用したリグです。

### これからのアマチュア無線の魅力？

開局から6mバンドを始めた頃を思い出しながら書いてみました。

今は、メーカー製のリグが自作するよりも安価に手に入るようになり、携帯電話機という持ち運びができる通話用の無線機が免許を持たなくても持てるようになりました。

また、不特定多数を相手にした通信手段としてはインターネットなるものが幅を利かせるようになりました。

振り返りますとアマチュア無線の魅力と言われていたもののうち、「自作の楽しみ」、「知らない人と会話する楽しみ」、「移動しながら通信する楽しみ」といったことには代替手段が出来ました。

横須賀クラブ40周年の時は携帯電話普及の前で、ハンディー機の魅力で若い方をひきつけていたと思います。

これから「何を魅力に若い方をひきつけるか」が課題のようです。

60周年の時にその答えを見ることができのでしょうか？

## ハムのきっかけ～ハムのたまご～開局当時の思い出

JH1OHZ 片倉由一

小学校入学頃までは我が家にはTVなどというものはなく、もっぱらラジオを聞きながらの一家団らんでした。このラジオがなかなかのHiFiでした。父の友人でラジオや電蓄を作るのが趣味の方がいて、その方をお願いして作っていただいたものとのことで、短波放送も受信できる横行スケールパネルがある2バンドラジオであり、電蓄用のオーディオ入力があり、厚いアルミシャーシー剥き出しの頑丈さと性能一本槍といった感じのものでした。出力は6V6プッシュプル、アウトプットトランスや電源トランスもそれ相当の大変しっかりしたものでした。真空管はGT管で構成されていましたが、整流だけは80BKのナス管が使われていました。

白黒TVが我が家にも設備された小学校低学年以降は、もっぱらTVを見ながらの一家団らんととなり、そのラジオは私がもらいうけ、自分のラジオとなるといろいろダイヤルを回して特に短波放送を聞いたりしていました。小学校高学年の頃だったと思いますが、短波バンドを聞いていると「ワンDSWさん...」とかしゃべっている放送ではない電波を受信しました。聞いていると応答している声からも「ワンDSWです...」とやっています。当時はJA1の時代ですからローカルQSOでは「ワン」だけで通じたわけです。はじめはワン=湾とも考え、東京湾に関連した無線局かななどとも思いましたが、話している内容が世間話だったり、学生さん同士の話だったりで結構おもしろかった。これが私のハムのきっかけでした。昭和30年後半頃だったと思います。

NHK教育テレビでアマチュア無線講座なるものが始まったのが昭和39年だったと思いますが、早速テキストを買い込んで講座を聞き始めました。興味をもっていましたから楽しいのですが小学校6年生の私には大変難しくその時は一旦挫折してしまいました。このテキストは昨年まで記念に残しておきましたが、家財片づけと一緒に捨てました。

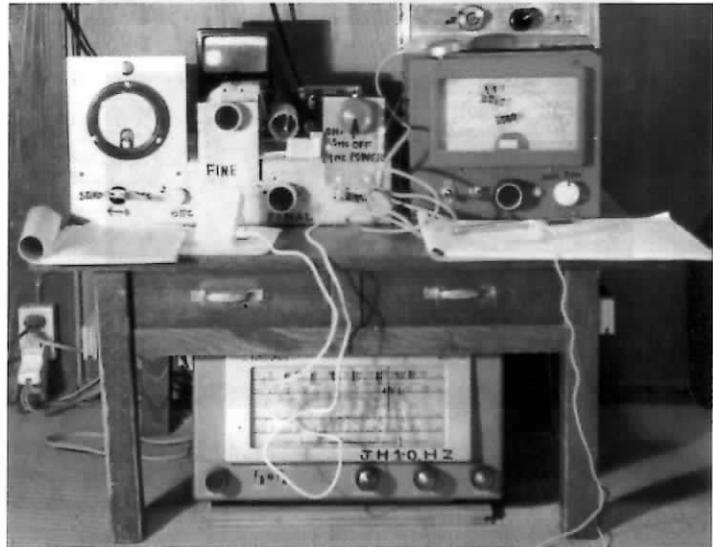
昭和40年不入斗中学に入学し科学部に入学したところ、先輩にハムを目指す人が数名おり、何人かで横須賀クラブのミーティングにSWLとして参加しました。これが横須賀クラブ入会のきっかけです。当時の先輩の一人が、JH1BLP佐野さんであり、横須賀クラブミーティングで坂本中学のラジオ研究会からSWLで参加していたのがJE1VQD(ex JH1DII)鈴木さんです。SWLでミーティングに参加していても無線の新しい話題や、必ずといっていいほど部品交換などがあって皆さん若々しくてわいわいがやがややって結構楽しかったのを思い出します。当時のクラブ名簿には最終ページにちゃんとSWLの欄もあってかなりの数のSWLがいました。当時は深田台の町内会館でミーティングが行われていました。

横須賀クラブ入会によって近所のOMハム宅に出かけていってシャック見学が大の楽しみとなりました。中学1年生になって電話級受験のため、いままでいったこともな

い中野まででかけ受験しましたが、 $1/2\pi\sqrt{LC}$ をはじめ、「式を示して解け」の問題は中学1年生の私には難しく最初の電話級受験は「不合格」となりました。

高校入学昭和43年春に電話級合格、秋に電信級合格となりましたが、横須賀クラブ登録上はなんとSWLを3年間もやっていたこととなります。

最初のリグは、高校生の無銭家としては小学校時代に自分の物になったラジオを分解し、部品、シャーシー、電源トランスをそのまま使い、ラジオではオーディオ出力として使っていた6V6PPを送信部6V6シングル、変調6V6シングルでアウトプットトランスをそのまま使ったハイシング変調の3.5, 7MHzの2バンドの送信機でした。電流計やツマミ類もシャーシーに裸状態で取付けただけの、シールドもされてないバラック送信機でした。これでも2エリアまで電波がとんだ時は大変嬉しかった。受信機は親類からもらったスプレッド付き船舶用5球スーパー短波ラジオでハリクラフターS-38Dが開局時のラインナップでした。アンテナは全長20m位のロングワイヤで電波さえできれば格好は気にならなかった熱血時代でした。



## 『8J1YKF 記念局 10MHz』

### 『電信 1000 局の交信と私のハムライフ』

JE1LGY 斉藤正夫



#### はじめに

##### 【先輩諸氏に感謝】

横須賀クラブが半世紀の長き年月、創立50周年を迎えることはアマチュア無線クラブの先輩諸氏が地道に活動し続けた賜で有ります。クラブの一員として多くの先輩諸氏の御努力に感謝しております。

##### 【私のアマチュア無線の免許取得経過】

今から数十年前の若き学生時代からになります。私はアマチュア無線に興味を持ち続けていたのですが、ただ関心のみで“どのようにしてアマチュア無線の免許を取得するか”などの疑問を抱く事までにはいかずにいました。

就職し職場の横須賀共済病院内でアマチュア無線取得の講習会を当時関東自動車工業のJA1EMQ坂元氏、JE1LES谷口氏、JE1LXJ小島氏の各先生が無線講習会を開催していただきました。私はその講習会で勉強し、晴海の国家試験で1985年昭和60年12月に電話級の免許を取得出来ました。翌年1986年昭和61年2月にJE1LGY局を開局し無線の楽しみを知ることが出来ました。

お教え頂いた先生方には深く感謝しております。

その後、前から電信に関心を持ち続けていたので翌年電信級を取得しました。電信交信の仕方は先輩諸氏に手ほどきを受け交信を始め、電信交信の楽しさを味わいながら数年後に2級免許資格を得ました。そして和文電信も興味に燃え、更に数年後1級免許資格と取得免許は進みました。

##### 【生涯の趣味を模索して】

アマチュア無線の趣味がここまで自分の趣味に入り込むとは思っていませんでした。

今まで音楽、演奏、写真等を趣味にしましたがすぐに飽きてしまい自分の物としての趣味には入り込めずに辞めてしまいました。

しかし無線交信の楽しさは私を虜にさせ、更に無線電信交信の楽しさを知り得たため、今後私の生涯の趣味として楽しむ事が出来そうです。

##### 【電信交信の楽しさを広めたい】

アマチュア無線の交信にはさまざま数種の交信手段があります。電信のトツートツと雑音の中から聞き出す信号のおもしろさは格別です。電信交信運用の人口数が減りつつある為、私の出来る力で微力ながら電信の普及活動しようとしています。その一つに電信交信の愛好家の集まり、JARLのA1クラブの一員として電信の普及活動をしています。

##### 【無線の運用を飽きずに継続させたい】

日々の生活の合間に、無理せず電波を出し地道に無線交信を楽しんでいます。アワードも無理せず少しずつ獲得しています。コンテストも少しずつ楽しみ、私の基本姿勢である“疲れるほどには無線運用をしていません。”

交信は電話と電信をその時の気分で楽しみ無線交信をしています。今後も開局以来と同じく“無理せずに無線を生活の隙間の時間を利用し楽しむ”つもりです。

##### 【8J1YKF局 10MHz 電信 1000 局交信】

2003年の大きな企画の横須賀開国祭記念特別局の運用で、私として『何かを目的に挑戦してみよう』と思い立ちました。1000局の電信交信を10MHzでしてみようと思いつき、週末武山に週末登り電鍵を叩きました。

楽しみながらそして個人的に満足な記念局運用サービスが出来たと思います。たった1000局かも知れませんが私なりに楽しみを味わうことが出来て満足しています。

つまり“このような満足が無線交信を長続き出来る心得”と私は思います。

##### 【無線をご指導頂いた方々に感謝】

多くの無線の方々とおつき合いを頂き、多くの先輩の方々より無線交信のご指導を賜り私がここまで来られた事に対し諸先輩諸氏に深く感謝しております。

##### 【地域活動にも参加しています】

私が住む池上の町内会も防災組織がありその組織内に情報班があります。アマチュア無線を情報班として取り入れ、災害時にアマチュア無線の活用出来るよう地域の方と協力し活動しております。池上町内会のアマチュア無線局JO1ZWTも開局し充実を図っている次第です。

##### 終わりに

##### 【今後生涯の楽しみとして続けていきたい】

アマチュア無線の趣味は無線交信を楽しみながら無線仲間として年令を問わずそして職業を問わず広い仲間とつき合うことが出来ます。私はシルバーエイジになった後も変わりなく無線仲間とのつき合いをするつもりです。

私のハムライフの運用場所は①家の中で②旅行先の宿泊所で③見晴らしの良い高台で、等々の無線運用場所から今後も無線運用を楽しみます。

アマチュア無線の趣味を楽しむ方々とのさまざまなおつき合いを通して、末永くJARL横須賀クラブの一員としてクラブに参加協力しハムライフを楽しむ事に致します。

JARL横須賀クラブの今後益々のご発展をお祈りしております。今後とも宜しくお願いします。